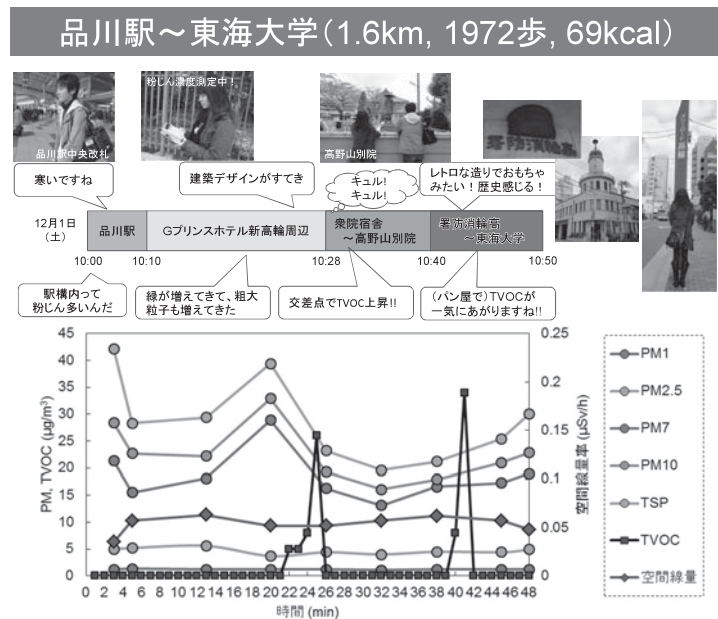


「考現学入門」

今 和次郎 著，藤森 照信 編集

文庫本，417ページ，定価1,050円
(筑摩書房，1987年1月)

近ごろ「路上環境学」と称して学生たちと街を徘徊している。錆びた青銅像を見つけては酸性雨を語り、建築物を眺めながら環境デザインを論じ、ゴミ箱の内容物を点検してリサイクルの現状を知る。環境科学的な視座をほんの少し持つだけで、街は豊かなキャンパスとなる。昨年からややマニアックになり、ただ歩いて観察するだけでなく、デジタル粉塵計、TVOCセンサー、放射線量モニターなどを携帯するようになった。道中の出来事に応じてメーターの表示が大きく変化すると「おおっ」という歓声があがる。周りの目が気にならないわけではないが、結構愉快である。自分たちが移動測定局として(ほぼ)自由に動き回れるので、某所の石像周辺は放射線量がやや高いとか、デパートの化粧品売り場は案外TVOC濃度が高くないとか、お寺でお参り中は粗大粒子に曝露しやすいなど、様々な「気づき」がある。実はこの活動、赤瀬川原平氏らが始めた「路上観察」や「タウン・ウォッチング」にインスピレーションを得ている。街の環境の変化は、自然現象であり社会現象でもある。路上環境学は、自然科学の手法を取り入れた路上観察の一種と言える。そしてこの原点は、本稿で紹介する「考現学」である。民俗学者の今和次郎(こん・わじろう)氏が提唱したこの考現学は、例えば銀座を歩く人々の服装を詳細に観察して記録するなど、今起きている社会現象の詳細な観察を通じて、人々の生活や風俗を分析する活動である。考古学をもじって名付けたといわれる。これは社会調査法として重要なフィールド・ワークの先駆けともいえる。「～学」というと少し硬い感じを覚えるが、本書を手にとると、今氏の軽妙な視点とどこかユーモラスなイラストについ笑みがこぼれる。あなたも「路上環境学」に参加しませんか？



(東海大学 関根嘉香)